

日本の中国観（七） （2010.9-2011.8）

藤田昌志

日本の中国観（七）

（2010.9-2011.8）

FUJITA Masashi

《摘要》

2010年9月7日上午发生了钓鱼岛渔船事件。在这个事件中我们一点儿也看不到邓小平提出的将钓鱼岛问题暂时搁置、留给后人解决的明智提案的影子。日本政府以司法权介入行政权的非常奇妙的“决定”释放该渔船船长。这个事件显示日中之间政治上没有得力的斡旋者，还使人感到掌握政权的政党变换促发了事件。本考察以在日本出版的有关中国的书籍为资料，在关注上述事件造成的现状的同时，考察、分析和探明现在日本的中国观。

キーワード：中国人観光客，知的財産権，上下関係，反日，功利主義

一、序

2010年9月に起こった尖閣列島漁船衝突事件では故鄧小平氏の尖閣列島領有権百年後決定、一時棚上げ論の知恵の片鱗も見られなかった。日本政府は司法権が行政権に介入するという奇妙奇天烈な「決定」によって漁船船長を釈放。この事件によって日中間に政治上の太いパイプのないことが露呈した。政権与党の転換が事件発生に拍車をかけた感がある。中国には歴史的に「人的関係」を重視する文化がある。西洋流の「契約」概念だけでは把握できない。日本が後ろ盾と頼む国に期待しても詮ないことである。本考察では、そうした時代の流れにも注意を払い、日本で出版された中国関連書籍を資料として現在日本の中国観を考察、分析し、明らかにしてみたい。従来の研究方法とは異なる方法による研究である。筆者はすでに（2010）『日本の中国観』（朋友書店刊）で、2004年9月から2009年8月にかけて日本で出版された中国関連書籍を資料として日本の中国観の考察を行っている。また、（2011）『日本の東アジア観』（朋友書店刊）でコリアを含めた、日本の東アジア観についても考察している。それら考察を踏まえて、本考察、研究では2010年9月から2011年8月にかけて日本で出版された中国関連書籍のうち、目に留まったも

のについて (従って定量分析ではなく、定性分析による) I . 社会関連書籍 (政治・経済を含む) 考察 II . 語学・文学・歴史・哲学関連書籍考察 III . 文化・比較文化関連書籍考察 IV . その他の書籍考察——に分類して、日本の中国観 (及び関連する日本観) について分析、考察を行う。本研究はアップトゥーデイトな日本の中国観を日本人、日本在住者がリアルに知ることに資すると考える。

二、日本の中国観 (2010.9-2011.8)

I . 社会関連書籍 (政治・経済を含む) 考察

金谷譲+林思雲 (2010.11) 『新・中国人と日本人——ホンネの対話』日中出版

本書は日中相互理解のために、二人の著者のメールのやりとりによって中国社会について日本社会との相違等を伝えようとするものである。

最近、日本に中国人観光客が急増したのは、中国で「誇示的消費」(人に見せびらかすために消費する)、`面子、のために海外旅行がブームになり、シンガポールやマレーシアといった安価な近くの旅行とヨーロッパやアメリカといった高価な旅行との間で、日本旅行が中間ランクの海外旅行先として位置づけられた結果だと言う (pp.28-29)。中国人には親戚や友人といった他人の代わりに買い物をする習慣がある。そのため中国人観光客の買い物の平均消費額が他国の観光客の二倍になる (pp.34-35)。割り勘を嫌う習慣や他人の代わりに買い物をする習慣は、中国では人と人の関係が濃厚で、日本的個人主義の価値観と異なることを物語っている。

中国には伝統的に「知的財産権」の概念はないと林思雲氏は言う。なぜなら、**中国の文人は漢代以来、伝統的に「利益を図らない」ことを主義として掲げ、利を図る商人を君子でない小人として卑しんできた。**士 (文人や士大夫 (= 中国の北宋以降、科挙官僚・地主・文人の三者を兼ね備えた者のことを指す)) と商の間には深刻な反目が存在した。**文人は著作の目的を金儲けのためではないとし、報酬を受け取るのを潔しとしないのだから著作権、ひいては「知的財産権」の問題など起こりようがなかった** (pp.210-211)。中国人に「知的財産権」の概念が存在しないもう一つの理由は、^{しやうこ}尚古思想が関係している。中国の文人は古典を非常に崇拝するが、同時代の新たな著作には価値を認めなかった。商業目的で書籍を印刷する`書坊、も^{けいてん}経典 (= 聖人・賢人の教えを記した書のこと。『論語』『易経』等。経書とも言う。) や古い時代の名著である`古籍、を刊行するだけで、同時代の新たな著作を出版することはなかった。中国古代の出版と今日の出版とは根本的に違う (p.211)。当時の作家は自費出版が常であったと言う。つまり、こうした歴史的事実が現在にも反映されており、有名な商品などもコピーされるのはそれだけ注目されているのだから、コピー

する側はむしろ自分が感謝されてもいいぐらいだという意識がどこかにあるのかもしれない。もっとも、最近はコピー商品だと指摘されると、すぐさま姿を消すから、中国当局や中国人もよくないことだと意識し始めたのだろう。むしろ日本のマスコミなどが「また、中国でコピー商品騒ぎ」などで見出し付きであら探しをし、中国はやはり日本より下だと決めつけてほっとしているのなど、程度の低い話である。日本の中国観の一端がそうしたマスコミ報道に現れている。不安なのだろう。従来の序列が変わりそうで・・・。

「漢族、のアイデンティティーの拠って来たところは「漢字」と「^{チー}気、の存在を認めていることにあると言う（p.220）（後者について興味のある方は本書を一読いただきたい。）。林思雲氏は日本人は「^{チー}気、の存在を信じていないと言う（p.223）。

^{そえじま}

副島隆彦（2011.1）『中国バブル経済はアメリカに勝つ』ビジネス社

尖閣列島について、鄧小平氏の「棚上げ論」「棚上げ政策」を再確認している個所は重要である（pp.56-61）。日、中両国が尖閣列島の領有権を主張しており、日中国交回復（1972）、沖縄返還（1972）、日中平和友好条約（1978）締結の際、問題になった。鄧小平氏は尖閣列島の日本の実効支配を認める代わりに、領土問題の決着を先送りするとの提案を行った。これがいわゆる「棚上げ論」「棚上げ政策」である（経済学者植草一秀氏ブログ引用による p.57）。その結果、北緯 27 度以南の海域（北緯 27 度から北緯 30 度 40 分にかけての海域は日中漁業協定で日中暫定措置水域ざんていそちに定められている）については、日中両国が自国船のみを取り締まるとの運用が行われてきたと伝えられている（同 pp.56-57）。「尖閣諸島の領有権については、日中両国間で最終決着がついていない。であれば、日本の海上保安庁が尖閣諸島海域を日本の領海だとの前提で、中国漁船の操業を停止させる、あるいは、この海域で日本の国内法を適用することには無理が生じる。」（同 p.57）。前原誠司外務大臣（当時）の「日中間に領土問題は存在しない」との発言は間違い（同 p.58）であるとする植草一秀氏のブログが優れた見解であり、一番明晰であると副島氏は言う。

宮本雄二（2011.1）『これから中国とどう付き合うか』日本経済新聞出版社

宮本氏は外交官。1990 年から 91 年にかけては中国課長を、2006 年から 2010 年まで駐中国大使を務めた。

日中の「歴史問題」はそれぞれの国内問題で、政治的立場によって異なる「歴史観」が形成されてしまったと言う（p.93）。日本という国と社会が「戦前の日本を自ら総括できなかったこと」が国民共有の歴史観をつくりあげることができなかった最大の理由だと考える（同）。宮本氏が“civil war”（南北戦争）と言うと、アメリカの南部出身者が（150 年

以上経っているのに) “northern aggression” (北部の侵略) と言い換えるように、被害者の記憶はなかなか消えるものではないから、そのことは充分自覚しておくべきである (p.95-96) と述べる。日本人はそうしたことにデリカシーを持つべきであろう (いつまでも昔のことを言うのと批判するのは、昔のことを「水に流す」日本的文化に過ぎない。普遍性はない。中国を日本の基準で図ってはいけない)。

2008年5月胡錦濤^{こきんとう}主席 (当時) 訪日の際、日中両国政府は『『戦略的互惠関係』の包括的推進に関する日中共同声明』を公表した。それは「日本のお詫びと反省の受諾」+「戦後日本の平和国家としての生きざまの是認」=「日本で軍国主義の復活はない」という方式が中国側で完結したからで (p.142)、この共同声明は新しい時代を反映した、これからの日中問題の道筋を示す、きわめて重要な文書だと宮本氏は考える (p.139)。日本のマスコミはどうしてこういう重要なことをもっと力点を置いて報道しないのだろうか。見識に欠けるのだろうか。イメージ、ムード、「感じ」、それも今のイメージ、ムード、「感じ」を他国認識の中心におく日本のマスコミ、日本とは一体、何なのだろうか。私は理解に苦しむ。あまりにも狭すぎるのではないだろうか。

遠藤誉 (2011.4) 『ネット大国中国——言論をめぐる攻防』岩波書店 岩波新書 (新赤版) 1307

本書は中国におけるネット状況をリアルに伝えているが、とりわけ「八〇后」^{パーリンホウ}の記述は重要である (「八〇后」については以前拙稿「日本の中国観Ⅴ (2008.9-2009.8)」で原田曜平・余蓮 (2009.7) 『中国新人類・八〇后が日本経済の救世主になる!』洋泉社 を扱ったことがある)。

改革開放、一人っ子政策は「おおざっぱに言えば」1980年から始まった。80年以後、生まれの若者を「八〇后」^{パーリンホウ}と呼ぶ。一人っ子政策以後の家庭では「一人っ子」が「小皇帝」^{シャオファン}で、八〇后世代の人口は今や2億8000万人に達している。彼らは1990年代半ばから、早くも15歳ころからインターネットに親しんでいる。八〇后は「政府からのトップダウンによる一方向的な思考回路ではなく、世界各国から発信される多種多様な情報で培われたバラエティに富んだ価値観」を持ち、「ボトムアップ的精神性」(p.121)を持つ。中国は「二一工程」という21世紀までに100の重点大学を決定し、その100の大学にのみ国家予算を大幅に投じる国策を採った。選別基準に「学生数の規模」が入っていたために中国の大学は巨大化した。入り口しか考えない、出口のことを考えない施策は「八〇后」を就職難に直面させることになる。「蟻族」^{ありぞく}(= 大学は卒業したが、極端な低収入でしか生きていけない若者たち)もその一部である。「意見領袖」(オピニオンリーダー)の説得力ある意見が「八〇后」「九〇后」に支持されるとネットが一気に燃え上がる。反日デモもネッ

トで呼びかけられ広がった。ネットは水流のように船（＝国、支配者等）を進めし、ひっくり返しとする。網民（ネット人）の83.0%（3億7931万人）は「低収入層」（＝若者の生活に最低限必要とされる月収3000元（一元＝12.5円として37500円）を下回る層。）で「エリート嫌い」という特徴がある。彼らは賄賂、汚職など金権政治に由来する事件に激しく燃える。

調査によると「八〇后」にとって「自分にとって最も重要なもの」は「独立」30%、「尊厳」26%、「自分個人の幸せ」23%である。「八〇后」が精神的プレッシャーを感じるものとして「マイホーム購入」（独身女性が独身男性に要求する背景がある。）23%、「就職」19%、「自己実現ができないこと」11%がある。「八〇后」の権利意識は強く、国は八〇后が反政府勢力にならないよう神経を尖らせている。「網民の声」は「民の声」。中国ネット言論の力と未来を見守っていききたい（p.209）と遠藤氏は言う。

平和・安全保障研究所編（2011.8）『アジアの安全保障』朝雲新聞社

中国は2009年中頃から外交において自己主張を強くし始め、2010年には「恫喝」外交の様相を帯びた（その根拠を2010年初頭よりの南シナ海西沙、南沙諸島の領有権をめぐる対決、9月7日の中国漁船衝突事件をめぐる事柄とする。）と言う（p.3）。中国漁船衝突事件では漁船は船首を巡視船の船尾に接触させ、逃走し、その後、追跡を受けた別の巡視船にも衝突し、逃げ、「4時間逃走した後に」停船命令に応じた（p.43）とのことである。「4時間逃走した」＝日本の巡視船が「4時間追跡した」ということである。なぜ、今までは「4時間追跡」しなかったのだろうか。鄧小平氏の「棚上げ論」「棚上げ政策」（＝日、中両国が尖閣列島の領有権を主張しており、日中国交回復、沖縄返還、日中平和友好条約締結の際、問題になった。鄧小平氏は尖閣列島の日本の実効支配を認める代わりに、領土問題の決着を先送りするとの提案を行った（1978年10月25日、日本記者クラブでの会見。そのことを指す）。その結果、北緯27度以南の海域については、日中両国が自国船のみを取り締まるとの運用が行われてきたとのことである。副島隆彦（2011.1）既述。）はどうなっているのだろうか。

Ⅱ．語学・文学・歴史・哲学関連書籍考察

永倉百合子／山田敏弘（2011.3）『日本語から考える！中国語の表現』白水社

山田敏弘氏は日本語教育の専門家、永倉百合子氏は中国語教育の専門家である。本のタイトルは素晴らしい。表現としての「日本語らしさ」はどのように表現としての「中国語らしさ」と対応し、また対応しないのか。残念な例を少し挙げる。「受身」についての個所。「宿

題を忘れて、弟にまで笑われた。」→“连～也(都)”は「受け身の文と一緒に使え」ず、「ここはあえて受け身の文にしなくても“连～也(都)”によって、そんな目にあったという感じは伝わります。我忘了做作业,连我弟弟也笑话我。」(pp.30-31)。／更にもう一個所。「(ケーキを見て)わあ、おいしそう」は“哇,这块蛋糕好像很好吃呀。”と「文法的には訳せても、それが中国語としてよく使われる自然な表現なのか、となるとそれは問題です。」「次のように言うのではないのでしょうか。」→“好吃吧!”(おいしいでしょうね!)、“这块蛋糕一定会好吃吧。”(このケーキ絶対おいしいよ。)(pp.90-91)。知りたいのは日本語の「受け身」と中国語の「受け身」がどのように違うかであって、目標言語としての中国語で日本語を「裁く」ことではない。日本語の方が「受け身」の範囲は広く、それは迷惑の受け身(自動詞)や被害・不快を表さない受け身の存在によって、また日本語表現の話者中心性によって証明できる。本書は中国語教育の専門家が日本語学を勉強しないといい中国語の説明はできない例であろう。この『日本語から考える!○○語の表現』はシリーズだが、同じような内容なら、同じ結果しか出ていないのではないだろうか。タンデム方式の語学学習の問題点も同様の理由による。——あえて建設的意見を述べる次第です。個人が視野を広げないで分業してもいいものはできないのではないのでしょうか。それは旧来の事物の寄せ集めで「創造」ではないからです。地名研究や地域研究、比較文化の難しさはそこにあると思います。

張競 (2010.12)『海を超える日本文学』筑摩書房 ちくまプリマー新書 149

張競氏(明治大学教授)による海外における日本文学の受容について論じた書である。「第四章 まちがいだらけの文学交流—誤解と反目の文学外史」の小項目「日中の文学観の対立」(pp.137-140)では、日本人作家佐藤春夫の郭沫若^{かくまつじやく}や郁達夫^{いくたつふ}への「師弟のまなざし」を取り上げる。それは日本人の中国観に関係がある。佐藤春夫は西洋文化と日本文化の「上下関係」を受け入れただけでなく、無意識のうちにそれを「日本文学対中国文学」の関係に転用しようとした(p.143)。しかし、郭沫若や郁達夫らの見方は違う。彼らは、欧米文学とのあいだの「上下関係」を受け入れても、日本の作家達が想像した、日中文学間の「上下関係」を受け入れようとはしなかった。魯迅も増田渉^{わたる}宛ての私信の中で、一部の日本人作家の傲慢ぶりに対し不快感を露わにし、晩年、日中の文学者は意思の疎通が難しいので、訪中する日本の友人との面会はやめるのがよいと日本人への手紙に記している(p.144)と言う。「いまも、われわれはなお欧米文学の巨大な影から一步も出られない」(p.157)。我々は現在、依然として精神面で欧米支配の世界に生きているのだと張競氏は言っているようである。村上春樹が一大ブームになったのも欧米で人気が出て認められ、ノーベル賞候補

となったことと大きな関係があり、アジアで村上春樹の作品がブームとなったことは（筆者注：日本人にとって）「日本と東アジアのあいだの文化の権力関係の再確認であり、「上下関係」の転用を欲望することである」（p.155）と張競氏は言う。この個所はアジアとの関係を「上下関係」で見るとぐいの「日本の中国観」への痛烈な批判となっている。この批判がわかるかどうかは日本人がアジアを理解できるかどうかの鍵となる。

**全訳注 藤堂明保・竹田晃・景山輝國（2010.9）『倭国伝 中国正史に描かれた日本』
講談社 講談社学術文庫**

本書の原本は1985年、学習研究社から刊行されたものである。藤堂明保氏（日中学院長（1982、83年当時。）、1963年東京大学教授。東大紛争で全共闘支持を表明した。1969年（昭和44）1月に大学側が東大安田講堂を占拠した全共闘学生を排除するため機動隊を導入、強行排除したことに抗議、大学紛争における教授会の責任回避を批判して1970年、東京大学辞職、1971年からNHKテレビ中国語講座講師担当。1972年から早稲田大学政治経済学部客員教授。1976年から日中学院長となる。中国語音韻学者。）が1970年代の邪馬台国論争を見て、「日本の知識人がこの問題を基本的な資料を正しく理解するところから出発して正しい認識を得る必要を強く感じて」（序 p.4）日中学院の教養クラスで「魏志・倭人伝」を始めとする中国歴代の正史に記録された日本、ないしは遣唐使、留学生、留学僧のこと、「元寇」、「倭寇」などの日中交流の状況に関する正史の書を聴講生とともに精読したのが本書のもととなっている。中国の正史における日本に関する記録の翻訳としては本書のように「後漢書」から「明史」に及ぶ九種の正史を網羅して扱った例は見られない（p.6）。

本書の印象に残った個所を二つ挙げることにする。まず一つ目は次の個所である。

『隋書』倭国の隋の大業三年、その王^{たりしひこ}多利思比孤（日本）が小野妹子を遣わしたが、その国書に「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや（＝お変わりないか）云々」とあった。帝（＝煬帝）はこれを見て「悦ばず、鴻臚卿^{つが}に謂いて曰く「蛮夷の書、無礼なる者^{こと}有り、復た（＝二度と）以って聞する（＝奏上する）勿かれ」（pp.192-193）と言った。日本の独立意思を象徴的に表した有名な個所と日本では考えられているが、内藤湖南は「聖徳太子—太子の外交方針—」（『日本文化史研究』所収）で「日出ずる処の天子、云々」は太子自ら筆を執ったのだらうといい、後、隋の使者^{はいせいせい}裴世清の持参した国書の初めにある「皇帝問倭皇」は「実は支那の書式としては皇帝問倭王である^{はず}筈」だから「日本で（天皇に）上られる時に少し手を加えたに違いない。」と述べている。歴代の遣唐使は中国に朝貢はせず「一度も上表を持って行かない。支那からも、他の国の如くに勅書を受取っ

て帰らない。それで以て国交を維持して、その使者の座席などは恆に外国の首位を占めたらしく、嘗て新羅の次位に置かれた時に日本の使者が抗議をしてその位置を換えたと言ふ故事が遺っている。」「大体、聖徳太子の方針が歴代の国交に遺って居って支那の間に不即不離の交通を維持して居たらしい。其の中にも見事なやり方は太子であって後にはこれほど巧妙には出来たことが無い。」(内藤虎次郎(昭和44)『内藤湖南全集』第9巻 筑摩書房 pp.55-57)と述べている。

「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや云々」には当時の日本の中国観、日本の中国への対等意識(かなり背伸びした、よく言えば徳富蘇峰の言う「負けじ魂」)が象徴的に表されているが、中国と「不即不離の交通を維持していたこと」、「上表」「勅書」の交換がなく朝貢関係はなかったが交流があったことなど日本独特の中国とのつき合い方を知ることができる。日清戦争以後とは全く異なるつきあいかたである。中国が元の例外を除いて日本に執拗に朝貢関係を持つように武断的な強制まがいのことをしなかったのは、国内問題の大きさもあっただろうが、やはり基本的に「文」の国だったからではないか(韓国、ベトナムからは異論も出るだろうが。地続きの地域、国と海を隔てた地域、国とではやはり大きな違いがあるのであろう。)

もう一つ印象に残ったのは次の個所である。秀吉の文禄の役(朝鮮では壬辰倭乱)、慶長の役(丁酉倭乱)の後、「明の世の終わるころまで倭に通ずるの禁、甚だ厳なり。閭巷(=村里)の小民、倭を指して相罵罵するに至り(=悪口をいうとき「この倭人め」といい)、甚だしきは以ってその小兒女を嚙ず(=「倭人が来るぞ」といって子供を黙らせた)と云う。」『明史』日本(p.392)の個所である。「倭人」は当時、野蛮な人間とみなされていた。「倭人」が中国にそうしたイメージで見られていたことは記憶しておいていいであろう。

渡邊義浩(2010.10)『儒教と中国「二千年の正統思想」の起源』講談社 講談社選書481

戦後歴史学はマルクス主義に基づき「世界史の基本法則」を中国史に適用することを目指していた。そうした時代風潮と一線を画し、白蓮教という道教から明清史を研究する視座を持っていた野口鐵郎を師とした渡邊氏は、白蓮教を儒教に、明清を漢魏晉に変えて研究を行った(あとがき p.253)。本書は鄭玄(漢学では「ていげん」と読む)、鄭玄への批判者で対極的な思想家である王肅の古典解釈の特徴を明らかにしながら、儒教がどのように国家の正統性を主張し、統治制度・世界観の根底を形成したかを探っている(p.9)。天子としての君主権の説明と皇帝としての君主権の説明がなされる。

曹操は「文学」の宣揚を行ったが、それは「名士」の存立基盤である儒教を突き崩すために、人事の基準を「文学」に変えようとした結果であった。しかし、曹操の文学は儒教

か文学かという二元論的選択ではなく（ここに曹操の巧みさがあると渡邊氏は言う。奸計をめぐらす曹操。）、そもそも「文学」という言葉自体が曹操の時には儒教を意味する単語で、儒教経典となっていた『詩経』、そうした「文学」と儒教との関係性を十分に踏まえた上で、自らの主張の典拠とし、さらには詩に叙情を加えていくのが曹操の「文学」なのである（pp.164-167）。明晰な曹操の「文学」についての説明である。従来の既成のものを批判、排撃、消滅させるのではなく、自らの主張の根拠とし、更に従来の既成のものに自らの主張をかぶせ利用していく。こうした頭のいい人（場合によってはさすがいとも言う人）は歴史上、時々出てくる。

**久保享（2011.1）『社会主義への挑戦 1945-1971 シリーズ中国近現代史④』岩波書店
岩波新書（新赤版）1252**

本書は1945年から1971年までの中国についてかなり「ずけずけ」と書いている。「ずけずけ」というのは1953年生まれ^いの著者には中国への贖罪意識は全くなく、そのチャイナ・ウォッチャー的な書き方を指しての謂いである。

かつて恩師に新中国は1949年から数年が言論が自由で、社会が清新の気に満ちていて一番よかったと尊敬する中国人が言っていたと聞いたことがある。軍勢力強化を可能にする急速な工業化を推進するとともに農業生産の低迷を打開して経済の全般的な発展を図るべく、1954年9月20日、中華人民共和国憲法が採択され、中国はその時から社会主義を選択した（p.69）（それまでは諸党派連合で社会主義を標榜していなかった。つまり、（反中主義者が（これだから中国は何があらうとダメという意味での）錦の御旗とする）「共産党独裁」ではなかった。）。)

中ソ対立を深めた最大要因はソ連がソ連主導の社会主義陣営が経済力、科学技術力によって資本主義陣営を圧倒していこうとしていたのに対して、中国は自らの主権の保持と経済発展を優先させる立場に立ち、各国の民族運動や革命運動を積極的に援助し、西欧諸国や日本、近隣諸国との関係改善を進めていく立場に立っていた（=毛沢東の中間地帯論の考え方）ことによると言う（p.146）。中国が「中華思想」的だと言うなら、こうした点がそうなのだろう。ソ連という他国の言いなりになるのを好まない。中国はかつて「帝国」をつくった国なのである。プライドは高い。文化大革命についての記述は否定面に終始し、肯定面がないのが公平さを欠く。現在の通説であろうが、肯定面にも触れるのがバランスの取れた記述であろう。“毫不利己，专门利人。”（「少しも自分のためを考えず、もっぱら人のためになるようにする。」）という面もあったと思う。利己と利他の問題は歴史上よく顔をのぞかせる。功利主義をめぐる論もそうだ。

Ⅲ. 文化・比較文化関連書籍考察

諏訪春雄 (2010.9) 『靈魂の文化誌 神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較』 勉誠出版

本書は「靈魂の働きである神・妖怪・幽霊・鬼について日本と中国、ときには朝鮮をも視野におさえた比較研究」(はじめに(3))で、他に類例を見ない書である。神については自然神、人格神、超越神の三つの段階の変化が中国にも日本にもあるが、日本で主として活動するのは人格神で、超越神は仏教の影響を受けて成立した修験道が優勢である。また、道教や儒教は中国のように神観念の中に大きな位置を占めていない(p.332)。妖怪は中国では怪異の現象をさし、幽霊は人の死後の靈魂を意味している。日本の妖怪に当たる言葉は中国では“精霊”であり、より明確に規定するときは“精怪”、“鬼怪”などと言う(p.329)。日本での妖怪と幽霊の区別は生と死、人間以外の存在と人間、異界と他界という三つの視点で説明でき、前者が妖怪で後者が幽霊である(p.331)。

鬼は中国では本来、自然に存在する精霊で、のちに主として死者をさすようになった。本来の中国の鬼は善悪両様の性格を備えた存在であり、神、妖怪(精霊)、幽霊の三者を包括していたがマイナスイメージを付与されるようになった段階で神と別れた。神と分かれた中国の鬼は妖怪(精霊)と幽霊の両者と完全に重なった(p.330)。日本の鬼は神との区別が曖昧な場合が多い(たとえば東北のナマハゲなどの来訪神は土地の人々に鬼と呼ばれているが、その起源地の長江流域にまでさかのぼれば本質は先祖の神々である(pp.332-333))。日本の鬼が中国や朝鮮の鬼などと大きく異なるのは人の心の中の鬼、敗者の鬼などの派生的、比喩的な存在を実体化している点である(p.333)。

結論。「日本の神・妖怪・幽霊・鬼は多神教の産物であり、中国のそれらは古代はともかく、道教が浸透した紀元後は一神教的多神教の影響下にあった。」「この事実が日本と中国の靈魂観を大きく違うものとした。」非常に面白い東アジアの比較文化論である。もうこういう東アジアの比較文化論を展開する時代なのである。

岡本隆司 (2011.1) 『中国「反日」の源流』 講談社 講談社選書メチエ 489

アップトゥーデートな本である。みんなが知りたい、中国の「反日」についての本である。中国の「反日」を初めからダメという視点からも、良いという視点からも論じていない。日本と中国の政治社会構造の違いから説明する。比較文化の視点がある。孫文、内藤湖南は立場は異なったが中国社会について期せずして同じことを言っている。内藤湖南の言で端的にまとめるなら「支那の政治といふものと社会組織とは、互に関係を持たなくなつてゐること久しい」ということで、中国史の研究でよく言われる、「国家と社会の遊離構造」

である（p.35）。中国の政府統治は20世紀になるまで、実地行政としては「刑名」（＝刑罰）と「錢穀」（＝徴税）しか行っていない。そして「他のことにはかまわず、生きるも死ぬも人民の勝手にまかせていた」（孫文「三民主義」山口一郎訳）（同頁）。人民も自分達で「郷団自治」（＝地方自治）をしていて、国家をあてにしていなかった。

太平天国の際の曾国藩の湘軍（＝湘は曾国藩の故郷、湖南省の別称）も同郷人中心に作った義勇軍である。太平天国も湘軍もいずれも湖南地方の有力な武装中間団体をリクルートした軍事勢力にほかならない（p.141）。国家が作った軍隊ではないのである。武装中間団体は大きくなれば地方「軍閥」になる。中国の国家主席が軍を掌握することにはこうした意味がある。軍を掌握できなければ、国家としての統一性が保てなくなるのである。中国の近代はそうした時代であった。

歴史的に見れば、中国の「反日」（＝日本への警戒心と言った方が適當である。）は遅くとも明代、日本を「倭寇」（ほとんど「倭（＝日本人）」でなかったのは、周知のことと岡本氏は言う（p.235。）とみなしてからそうであり、現在に直接つながる「反日」は日露戦争の終わり、20世紀の初めに始まったものである（p.231）。

『史記』に始まる東アジアの歴史記述は「儒教の教義を事例叙述に翻案したもの」、「イデオロギーの表明」であると言う。皇国史観もマルクス史観もイデオロギーと自己主張を語ったものにすぎない。「政治の問題が歴史のみかたとしてあらわれる」、それは教科書・教育現場にまで貫徹している。「そこに欠落しているのは、近代歴史学の理想である。ありのままの事実をみいだす、つきつめて考える、という努力であり、あくまでそれにもとづいて意見を築き上げる、という態度である」（p.234）。こうした態度が反日・嫌中の呪縛から自由になる道を開くと岡本氏は言いたげである。岡本氏は「歴史事象の類型化」、「普遍性を持つ歴史観」の確立を目指しているように見受けられる。広い視野と広い学識を持つ人である。

小林武 佐藤豊（2011.2）『清末功利思想と日本』研文出版

本書は梁啓超の功利主義思想と章炳麟の反功利主義思想が、日本の明治思想といかなる関係にあるのかを考察した（p.3）ものである。日中比較文化学である。時代の風は比較文化学に吹いている。それが国際化時代の実りある一つの姿である。

「自由」という漢語の語感は清末中国でもすこぶる悪い。代わりの「自主」も批判が強かった（p.62）。梁啓超は福沢諭吉的な功利主義的路線は採用せず、士人層に陽明学的な「私徳」の涵養によって国家への忠誠心を高めることを求め、民衆には墨子の宗教を説いた（pp.15-16）。梁啓超は「民衆の国民としての資格に疑問を持っ」ていた。士人の伝統的な

「階級」的発想である。「刑は大夫に上らず、礼は庶民に下らず」(『礼記』「曲礼上編」)。章炳麟は儒教や士人の富貴利禄性を批判し、功利主義を拜金主義と重ねて理解した。「俱文進化」(進化とは善悪、苦楽の並進だとし、社会進化論を批判したもの。進化したら善、楽は増えるが悪、苦も同様に増えるとする。当を得ている。)という発想は高山樗牛論文をヒントに独自に展開させたもの(pp.296-301)である。また、章炳麟が反功利主義的倫理観を形成する上で、ショーペンハウアー著中江兆民訳『道徳学大原論』が影響していること(p.16, pp.333-343)を明らかにしている。

日中対照表現論という語学研究を基礎として己の客観性を鍛え、日中比較文化学確立を標榜する私はこうした本の出版されることが非常に嬉しく、励まされた。章炳麟が「俱文進化」という発想を高山樗牛論文をヒントに独自に展開させたという論は刺激的である。逆に、非影響の例として、魯迅が日本留学中、自然主義全盛期にもかかわらず、自然主義に見向きもしなかったことが挙げられる。

^{ともはる}
代田智明 (2011.3) 『現代中国とモダニティ - こうもりの polemique』 三重大学出版会

「日本における中国に関する人文学」についての著者なりの整理・総括で、「近年と現在の中国関係人文学の様相を通覧することを目的」とした書(あとがき p.326)である。日本の中国関係学者の中国観を考察した書である。とりわけ溝口雄三(1989)『中国の衝撃』、(2007)『中国思想史』(溝口雄三氏は第3章、4章執筆)(ともに東大出版会刊)について考察したところは秀逸である。溝口氏は中国の「革命」「近代」を根本から考え直す「視座」を模索した。かつて内藤湖南が宋代を「近世」としたように、西洋的近代化基準(アヘン戦争を近代の始まりとする)を捨てて、宋代以降の中国近世近代史全体を構築し直そうとした(p.159)。溝口中国説は日本の近代化が「分権→集権」という道筋をたどったのに対して、中国の近代化は「分権化」を主流とした流れであったと言う(p.164)。より詳しく言えば中国の近代化は「集権→分権→集権という循環サイクル」であった(『中国の衝撃』)。その溝口氏が(中国では)「結局、西洋列強および新興の日本による植民地的干渉や軍事的侵略という国際環境の中で、中央集権的な「国民国家」というコースが選択された」(『中国思想史』p.217)と「国際環境」が最大の動力と言うのは矛盾ではないかと代田氏は言う。中国の進んだコースを中国の歴史の流れと西洋近代の「交錯」「化学反応」と見る視点(『中国の衝撃』pp.93-100)をもっと深めるべきであったと感じざるをえないと述べる代田氏の眼は鋭く、理知的である。

それよりもっと気になるのは「人民共和国が、日本のような凝集的な中央集権国家なのかどうか」ということで、「分権的要素を強く宿した、近代国民国家のあり方もある」の

であり、「中国は前近代からの社会的趨勢を引き継いでおり、ただそれが、観念や外部からだ、潜在的にしか見えないだけではないか」（pp.164-165）と言う。この視点には次の言辞と共通の考えが見てとれる。曰く「（筆者注：『竹内好という問い』の著者である孫歌氏は）竹内が、政治と文学を初めとして、物事を二項対立的に捉える思考を忌避し続けたことも主張する（もっともこれはユダヤ教の伝統を引くレヴィナスやデリダにも共通することだが）」（p.267）。同様に代田氏は三者のヘテロ的組み合わせを提案する。たとえば日本の中国研究者が、韓国をも二次的に対象とする、というようなこと（p.84）である。それを「アジア三角学のススメ」という題で述べている（pp.81-85）。平川祐弘氏（東大名誉教授 元東大比較文学比較文化研究室主任（1988年－1992年））の類似の主張を想起した。

野島剛（2011.6）『ふたつの故宮博物院』新潮社 新潮選書

台北故宮は不便な山中にある。「展示よりも収蔵を重視する博物館」（p.16）である。中国歴代王朝の皇帝は文物の収集に血道をあげそれを保持することによって、自らの「権力の正統性」を高めようとした。台北故宮はその中国の伝統に則^{のど}って（p.76）、不便な山中にある。中国には歴史的に見ないとわからないことが多い。台湾の民進党（台湾独立派）と国民党（中華アイデンティティを強く持つ。保守派。）では故宮への考えが違う。前者が台湾文物を故宮コレクションの範囲に含めようとするのに対して、後者はそれを拒否し、故宮を（台湾文物を含まぬ）「中華文明の中心」と考える。北京故宮と台北故宮の協同の故宮展の実現を！

IV. その他の書籍考察

朱建榮（2010.9）『中国で尊敬される日本人たち 「井戸を掘った人」のことは忘れない』中経出版

本書で紹介される日本人たちの中国観は隣国のためにできるだけのことをしようという善意の気持ちに尽きる。朱建榮氏の本については「日本の中国観Ⅱ」（拙著（2010）『日本の中国観』朋友書店 pp.26-32）で論評したことがある。氏については「中国での日本理解の把握と日本のそれへの対処の仕方を検討・提言したいという中国の人がいるのはありがたいことである」と述べた。本書はまさに「中国での日本理解の把握」＝「中国で尊敬される日本人はどういう人たちか把握する」ことを目論んで執筆されたものである。田中角栄の「「迷惑」をかけた」発言に対する毛沢東の『楚辞集註』の贈呈は、『楚辞集註』の「「九辯」に「迷惑」という表現が二回使われたが、それぞれ異なる意味があって、角栄が

使った「迷惑」の表現は現代中国の理解と違っても、別に間違っていない、と伝えたかったのである。」(p.43)と決定版の説明をしている。当時、日本では田中角栄をくさし、翻訳をくさしたが、どうして日本人は物事の悪い面からばかり報道するのだろうか。そういう報道ばかりするマスコミはいったい、何様なのかと思う日本人は多いだろう。マスコミの自浄作用に待つしかないのだろうか。

「大平学校」(1980年から5年間、大平正芳元首相の発案で日本語教育の人材育成、知日派の大規模かつ効果的な育成を行ったプロジェクト)の効果も高く評価し、「今、中国の対日関係で活躍している多くの人は、「大平学校」とかかわりがある。中国の各大学の日本語、日本文学などを教える学部、学院のトップを務める人の半分以上は「大平学校」の出身か、その出身者の教え子である。」(p.64)と言う。「大平学校」の意義については「日本の中国観Ⅰ」(拙著(2010)『日本の中国観』朋友書店 p.16)で論評した莫邦富も高く評価し「コスト対パフォーマンスの効果を考えると、まさに最高と言えるだろう。」(2003年度までの日本の対中国ODA(政府開発援助)累計供与額は、全体の九割を占める円借款が三兆四百七十一億円で、ほかに返済不要な無償資金協力と専門家派遣などの技術協力がそれぞれ一千四百億円を超えた。大平学校はそのうちのわずか十億円であった。) (p.16)と述べていた。莫邦富氏、朱建榮氏等識者の考えることは同じである。

三. 結び

以下、本考察についてまとめておく。Ⅰ. **社会関連書籍(政治・経済を含む)考察** では金谷讓+林思雲(2010.11)が中国に伝統的に「知的財産権」の概念がなかった理由を教えてくれた。^{そえじま}副島隆彦(2011.1)の尖閣列島について、鄧小平氏の「棚上げ論」「棚上げ政策」を再確認している個所は重要である。遠藤誉(2011.4)は網民(ネット人)、「八〇后」に注目する。中国社会は激しく動いている。Ⅱ. **語学・文学・歴史・哲学関連書籍考察** では張競(2010.12)が、郭沫若や郁達夫らは欧米文学とのあいだの「上下関係」を受け入れても、日本の作家達が想像した、日中文学間の「上下関係」を受け入れようとはしなかったことを述べている。今後の(東)アジア関係では「上下関係」を中心にはできない。Ⅲ. **文化・比較文化関連書籍考察** では岡本隆司(2011.1)が「国家と社会の遊離構造」から中国の「反日」を考えている。Ⅳ. **その他の書籍考察** では朱建榮(2010.9)のように大平学校は中国で評判がいい。「人」の養成、育成は中国の人の心にフィットするのだろう。

金谷讓+林思雲(2010.11)、岡本隆司(2011.1)はとりわけ日本の基準で中国を判断してはいけないことを教えてくれている。そのことはいくら注意しても注意しすぎることはない。

我々はこの65年間、欧米、とりわけアメリカの見方を空気のように受け入れ（アジアをアメリカの目で見）てきている。そろそろそのことを自覚して、新たな国際関係を模索する位置に立つ必要がある。我々は未だに100年以上前と同じ社会ダーウィニズムの世界にいる。本研究、本考察はそのことを教えてくれている。日本の中国観について考えることは、日本の「近代」について考えること、戦後65年について考えることに通じるとの認識を新たにしたい。

【付記】本稿は日本比較文化学会関西支部2011年度10月例会（於同志社大学今出川校舎）で発表した内容をもとにして作成したものである。

【引用文献・参考文献】

- (1) 全訳注 藤堂明保・竹田晃・景山輝國（2010.9）『倭国伝 中国正史に描かれた日本』講談社 講談社学術文庫
- (2) 諏訪春雄（2010.9）『靈魂の文化誌 神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較』勉誠出版
- (3) 朱建榮（2010.9）『中国で尊敬される日本人たち 「井戸を掘った人」のことは忘れない』中経出版
- (4) 渡邊義浩（2010.10）『儒教と中国 「二千年の正統思想」の起源』講談社 講談社選書 481
- (5) 金谷譲+林思雲（2010.11）『新・中国人と日本人——ホンネの対話』日中出版
- (6) 張競（2010.12）『海を超える日本文学』筑摩書房 ちくまプリマー新書 149
- (7) 副島隆彦^{そえじま}（2011.1）『中国バブル経済はアメリカに勝つ』ビジネス社
- (8) 岡本隆司（2011.1）『中国「反日」の源流』講談社 講談社選書メチエ 489
- (9) 久保享（2011.1）『社会主義への挑戦 1945-1971 シリーズ中国近現代史④』岩波書店 岩波新書（新赤版）1252
- (10) 宮本雄二（2011.1）『これから中国とどう付き合うか』日本経済新聞出版社
- (11) 小林武 佐藤豊（2011.2）『清末功利思想と日本』研文出版
- (12) 代田智明（2011.3）『現代中国とモダニティ —こもりの polemique』三重大学出版会
- (13) 永倉百合子/山田敏弘（2011.3）『日本語から考える！中国語の表現』白水社
- (14) 遠藤誉（2011.4）『ネット大国中国———言論をめぐる攻防』岩波書店 岩波新書（新赤版）1307
- (15) 野島剛（2011.6）『ふたつの故宫博物院』新潮社 新潮選書
- (16) 平和・安全保障研究所編（2011.8）『アジアの安全保障』朝雲新聞社